

図書館員のための資料ガイド： 教科書の歴史

谷 口 一 弘

はじめに

図書館におけるレファレンス・サービスとは、利用者の求める資料・情報の探索や入手を、直接的・個人的な方法により援助することである。すなわち、個々の図書館利用者に対して、図書館員によって行われる人的援助を指すとされる。

このレファレンス・サービスは、参考業務ともいわれ多様な各種図書館サービスのなかでも、特に図書館員が司書としての専門性を問われるセッションの一つであるといわれる。いわば、司書としての自覚を強く意識させられ、資質の問われる場合が多いとされていることである。図書館のなかでも、主な利用対象者をその組織の構成員としている大学図書館や専門図書館、あるいは公共図書館のなかでも、地域での中核的役割を担い比較的に専門的な利用内容を求められる図書館などでは、その傾向が大きい。すなわち、レファレンス・サービスを行う担当者の資質がレファレンス・サービスを成立させる大きな要素の一つであるといえる。

しかしまた、そのレファレンス・サービスを支える一方の要素が、利用者の情報要求に応える、優れたレファレンス・コレクション（参考図書）

の構成であろう。しかし、実際の業務のなかには、レファレンス・サービスが時には専門的・学術的領域にわたることもあり、既製の参考図書や自館の蔵書だけでは、利用者の要求に的確に応えることが難しく、対応に苦慮することもしばしばである。

このようなとき図書館では、独自にこうした専門的・学術的分野の情報を収集し、自館作成の参考業務用ファイルとして蓄積するとともに、それを管理、維持、更新等を行うことにより自館のレファレンス・コレクションの補助的ツールとして、利用者への提供が可能となるのである。さらには、レファレンス・サービス担当者をして、専門的・学術的分野に対する知識と、その領域に関わる専門的資料情報への資質を高める一助ともなりうるのである。

本稿は、このような自館の参考業務用ファイル作成のための資料の提供を目的としている。すなわち一例として、わが国の現行の教科書検定制度以前の、明治以降の近代学校教育制度とともに歩んできた、戦前までの「わが国の教科書制度の変遷」を取り上げ、前述の専門的・学術的領域にアプローチするツール作成のための主題知識や資料情報を提供することで、レファレンス・サービス担当者のための資料ガイドとなることを意図している。

1 国定教科書制度以前

近代以前の江戸期における教科書といえば、主に武士階層の子弟を対象とした漢籍類と、庶民の子どもたちが寺子屋などで使用したいわゆる往来物とに大別される。

明治5（1872）年、「学制」の発布により日本の近代教育制度がスタートした。それとともに近代小学校の出発に際し、そこでの具体的な教育内容を示す学校現場での教科書を、如何にするかが大きな問題であった。結

局、とりあえず欧米の進んだ文物を取り入れた図書を教科書に使用することでスタートした。

教科書が国定となる以前は、概ね以下のような制度の変遷がみられた。ここでは、各期の下で使用された教科書のなかから、比較的に普及したものであるいは、特徴的なものを取り上げ制度とともに概説する。

1-1 自由発行、自由採択時代 <明治5(1872)年～>

当初の教科書は自由発行、自由採択であった。明治初期は文明開化の風潮もあり、当時のベストセラーでもあった『学問のすゝめ』（福沢諭吉）などは、教科書としても広く使用された。その他に、『ちゑのいとぐち』（古川正雄）、『ういまなひ』（柳河春蔭）、『西洋事情』（福沢諭吉）、『西国立志編』（中村正直）なども普及した。

この時期は教科書のスタイルも決まっておらず、従って地理、修身、物理、化学、博物など欧米の教科書を翻訳あるいは抄訳編輯したものが多く使用されており、この時代は別に翻訳教科書時代とも呼ばれている。

◆『小学読本』巻1～4 文部省編纂 師範学校翻刻 明治6年

田中義廉の翻訳になるもので、原本はアメリカのウィルソン・リーダ(M. Willson: The First Readers of the School and Family Series)である。

巻1の「およそ世界に住居せる人に五種あり…」の巻頭の一文は「酒屋や魚屋の小僧までがそれをさえぎった」とまで謂われ、当時最も普及した教科書である。



図1 『小学読本 巻1』

この後、これに倣った各県の

翻刻版が各地に普及したが、文部省編纂になる巻はこの巻1～4までで、その後、田中によって理科的教材を主とした巻5、6（明治8年～）が追加され巻1～6として民間から刊行された。

◆『小学入門』甲号 文部省 明治7年

当時、師範学校で編輯した入門教材図の『いろは図』、『五十音図』、『算用数字の図』、『加算九九の図』、『単語図』、『線及度図』、『色図』などの掛図を一冊として収録し、小学校初等科第1学年前期用として作られた教科書である。

内容的には、国語教材以外の教材も多く含んでおり、以後の教科書のスタイルの原型となったともいわれている。

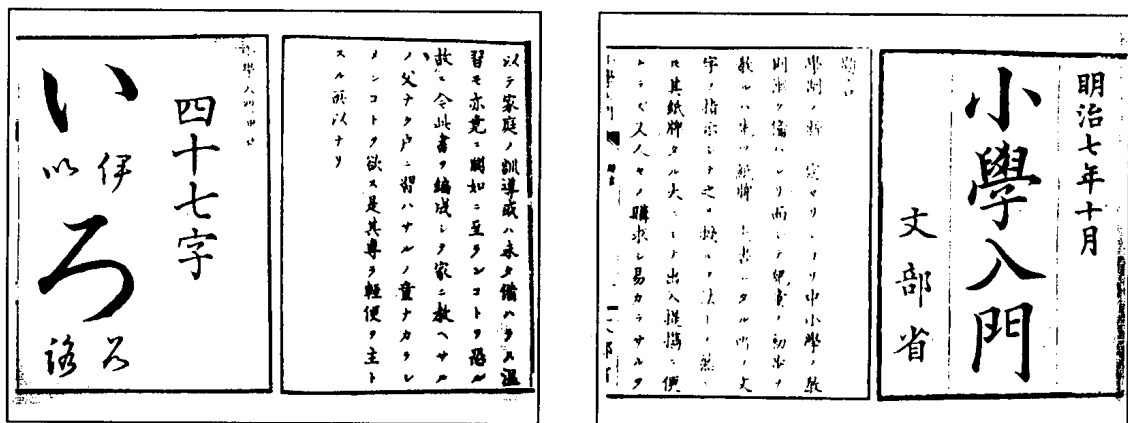


図2 『小学入門 甲号』

◆『単語図』第1～8（掛図） 文部省 明治7年

『単語図』は第1～8までと、これに続く『連語図』が第1～10まであり、いずれも掛図として使用され、後に『小学入門』（甲号、乙号）に収録された。

発音の練習も兼ね、「イ」と「キ」、「イ」と「ヒ」、「キ」と「エ」など類似の発音を含む単語が示されている。また、単語を教えると同時に、そ

の文字が表す実物を絵で示すなど、工夫がこらされている。



図3 『単語図 第1』

1-2 開申（届出）制、認可（許可）制時代 <明治15(1882)年～>

文部省は、明治14年5月「小学校教則綱領」を制定し、これまで各小学校で自由採択されていた教科書を開申（届出）するよう指示し、さらに、同16年には、この届出制を認可制に改めた。

文明開化や欧米重視の風潮への批判、自由民権運動の抑圧等と関わって、教科書は伝統的、儒教的傾向が強まり、復古主義的色彩の濃い内容となっている。

◆『小学読本』巻1～5 若林虎三郎編纂 明治17年

初等科第1学年後期から使用するもので、当時アメリカから移入されたペスタロッチの教育観を基とした開発主義教育方法を取り入れて編集されている。児童の直観や経験を重んじる、当時最も進歩的な教科書といわれている。

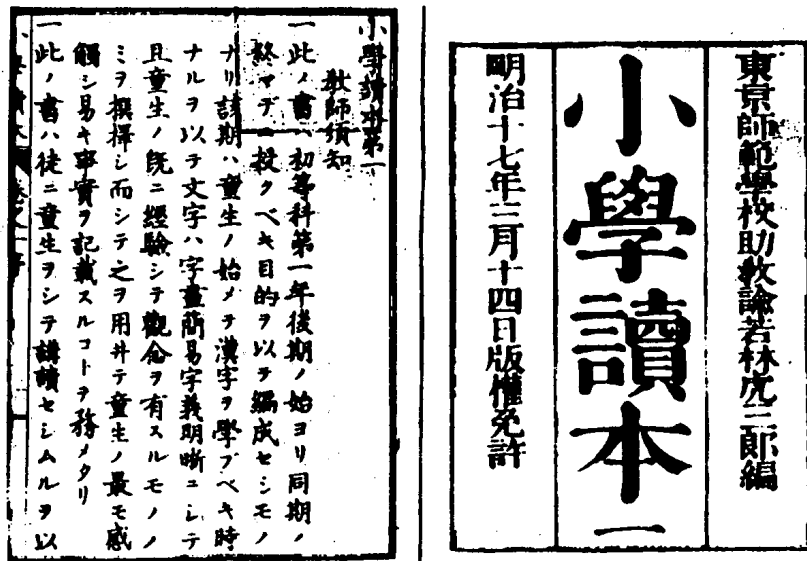


図4 『小学読本 卷1』 若林虎三郎編

1-3 明治検定制時代 <明治19(1886)年~>

内閣制度の発足に伴い、初代文部大臣に森有礼が就任（明治18年）し、ドイツの教育政策を取り入れた「小学校令」が公布された。ここに「小学校ノ教科書ハ文部大臣、検定シタルモノニ限ルベシ」（第13条）と定められ、小学校における検定教科書の制度化がはかられた。

◆『読書入門』（ヨミカキニューモン）

文部省編輯 明治19年

尋常小学校第1学年前期用として、湯本武比古がドイツの国語教科書を参考に編輯したもので、以後の読本編纂の基礎となったとされる。

特徴として、従来は「読み」を主としたのに対し、「読み」と「書き」を並行させたこと、

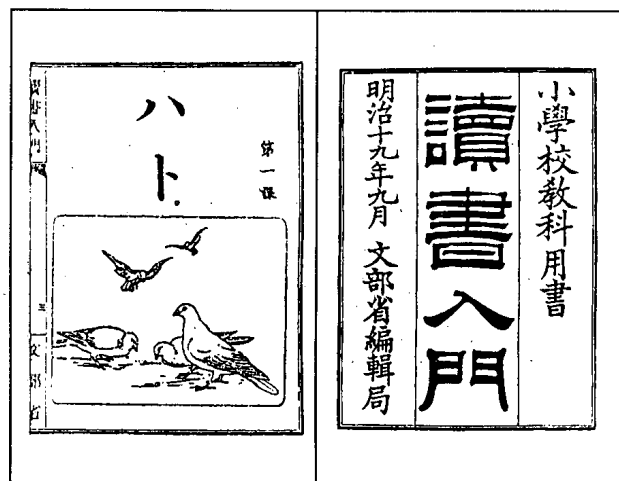


図5 『読書入門』 文部省

「片かな」「平かな」「かな文字」「五十音図」の順序性を取り入れたこと、韻律的文章、口語文、童話的文が多く取り入れてあることなどが特徴的となっている。

◆『尋常小学読本』巻1～7 文部省編輯 明治20年

尋常小学第1学年後期から4年まで使用するようになっている。

児童の発達段階に則した教材の配列と編輯がなされた点で、画期的とされる。口語体を多く取り入れているが、教材の殆んどが、忠孝、勤勉、立身などの徳用を説いており、国家主義的性格の濃い内容となっている。

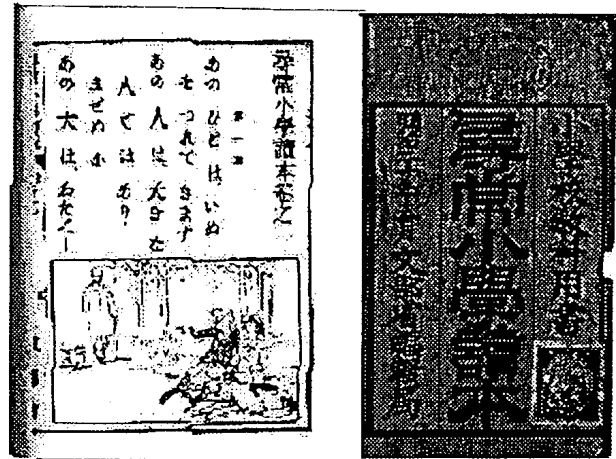


図6 『尋常小学読本 巻1』 文部省

◆『国語読本』尋常小学校用 巻1～8

坪内雄蔵 富山房 明治33年

文学者坪内雄蔵（逍遙）による独創的な編輯として、評価の高かった教科書である。

物語教材も多く文学的性格とともに、児童の心理と生活に合ったものとして、この期における民間発行の教科書のなかでも、同じ著者による高等科用とともに多くの学校で使用された。

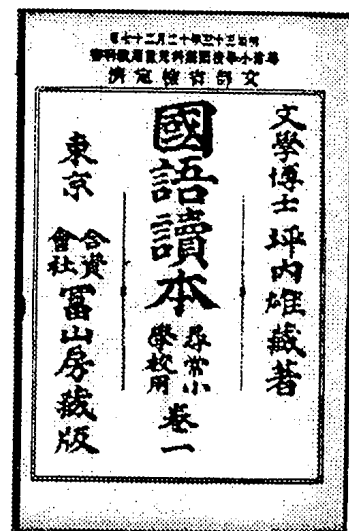




図7 『国語読本 巻1』 坪内雄蔵

2 国定教科書の変遷

国定教科書とは、国が学校で使用する教科書を国または国の指定する機関、団体等が著作・発行したものに限定し、その使用を特定したものをいう。明治33（1900）年「小学校令」が改正され、尋常小学校の修学年限を4年に統一し、これを義務教育期間としたが、使用する教科書は従来のままの検定制度がつづいた。ところが、同35年にいたり教科書の審査、出版等に絡んだ疑獄事件が表面化、教科書制度の改革が求められた。その結果、同36年「小学校ノ教科用図書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルベシ」（「小学校令」第24条）と定め、翌年4月から教科書の国定制度がスタートしたものである。

ここでは、国語と歴史の教科書を取りあげ、国定各期の特徴を概観してみる。なお、国定各期では、それぞれ幾度かの修正等がなされているが、ここでは省略した。また、国語と歴史とでは改訂時期に若干のずれがあるため、結果的に教科による国定期の区分に差異が生じている。さらに、例

えば国語の区分についていえば、通例では第5期までとされているが、研究者によっては、戦後の暫定期を挟む昭和22年度からの「文部省著作教科書」の期間をもその対象とする見方もある。本稿では、この暫定期と「文部省著作教科書」および暫定期の前、緊急避難的に使用された「墨ぬり教科書」とを合わせて別項目として解説する。

教科書使用世代の表示は、標準的な使用世代年を示したものであって、実際には各地の実情によって使用世代年には若干の異同もあったようである。特に、歴史の使用世代については、学年移行による使用開始の時期、各地での教科書採用期のずれなどの差異がみられ特定が難しいため、これを省略した。

なお、明治40年からは義務教育の年限が6年間となり、また、昭和16(1941)年には「国民学校令」が公布され、尋常小学校は国民学校となった。

2-1 国定第1期

【国語】

教科書名：『尋常小学読本』1～8（通称：「イエ・スシ読本」）

使用開始年：明治37（1904）年～

使用学年：尋常小学校第1～4学年

使用世代：明治30年4月生～

（解説）

通称「イエ・スシ読本」といわれ、国定期最初の教科書としては、内容も近代文明を多く紹介し、むしろ近代的性格を多分に有していた。

「発音ノ教授ヲ出発点トシテ、児童ノ学習シ易キ片仮名ヨリ入り」とあり、音声、語法を重視し、単語の前にカタカナの単音と絵との組み合わせ

から指導に入り、ひらがな、漢字の順に進む構成で、殆ど口語文である。

尋常小学校の修学年限が4年であったため、各学年2冊の使用となっており、表紙・本文とも黒の一色刷りである。

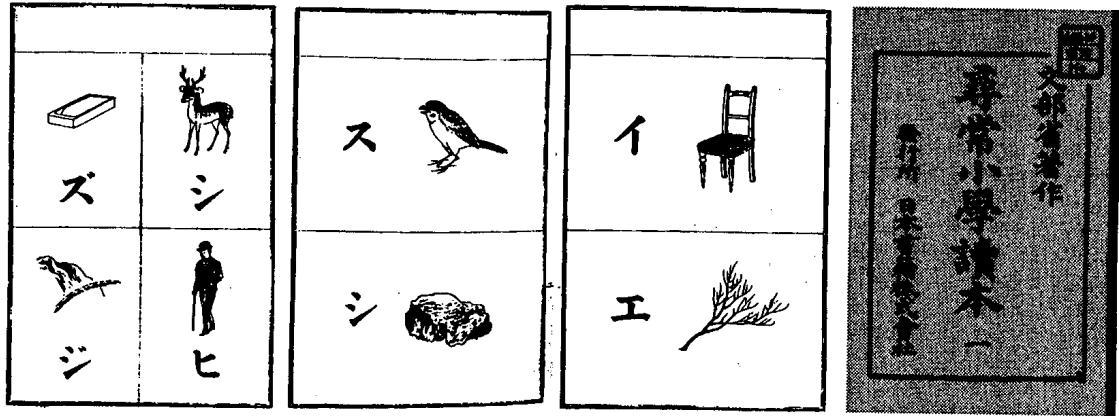


図8 『尋常小学読本 1』

【歴史】

教科書名：『小学日本歴史』1～4

使用開始年：明治37（1904）年～

使用学年：高等小学校第1～4学年

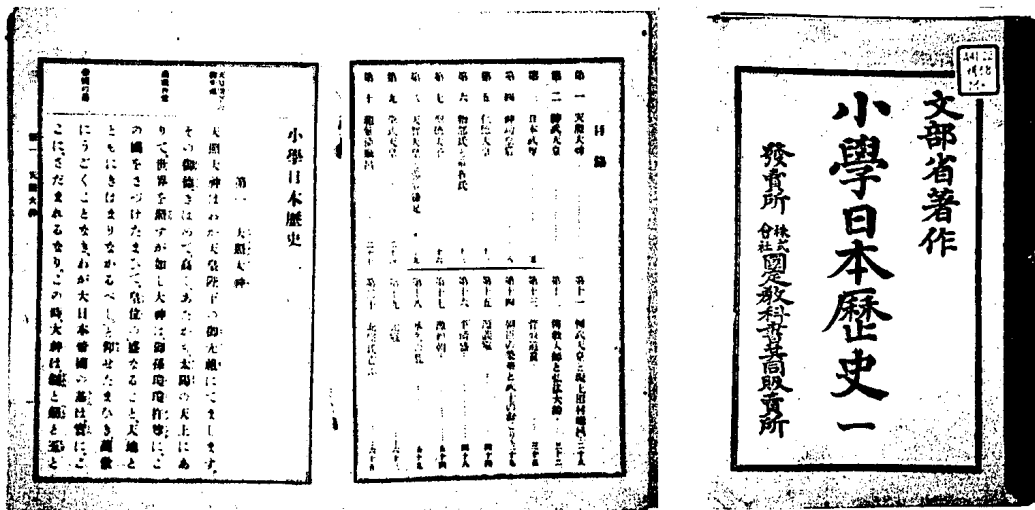


図9 『小学日本歴史 1』

(解 説)

主に各時代を代表する人物を課の題名とした、人物中心の編輯である。

内容は、これまでに使用されていた「明治検定教科書」を踏襲したものとなっているが、その内容から「壬申の乱」を削除するなど、天皇中心の家族国家観に基づく国民の育成がうかがわれる。

2-2 国定第2期

【国 語】

教科書名：『尋常小学読本』巻1～12（通称：「ハタ・タコ読本」）

使用開始年：明治43（1910）年～

使用学年：尋常小学校第1～6学年

使用世代：明治36年4月生～

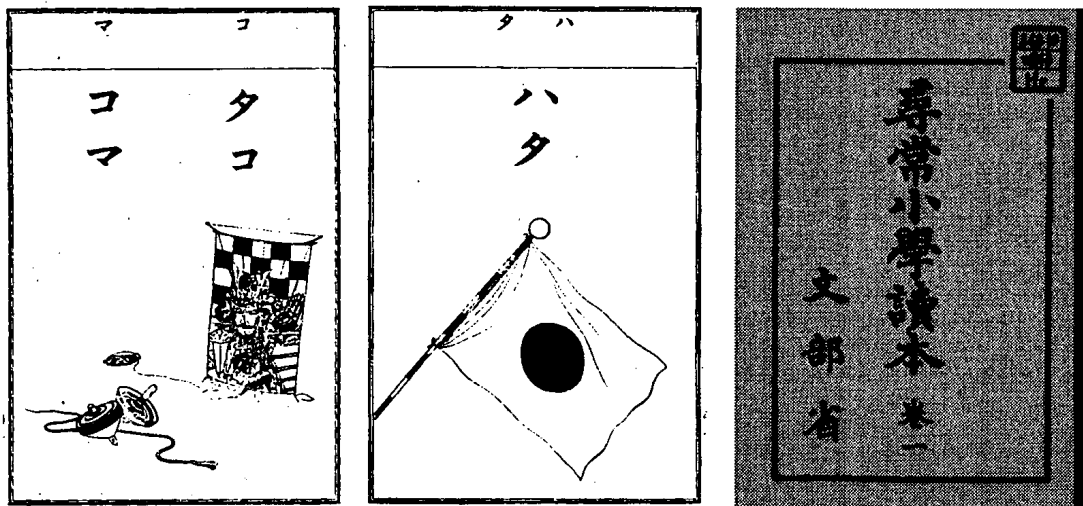


図10 『尋常小学読本 巻1』

(解 説)

通称「ハタ・タコ読本」といわれ、指導はカタカナの単語から入り、初出文字を上欄に出している。

明治40年「小学校令」の改正により、尋常小学校の義務教育年限が6年となり、使用教科書の巻数も各学年2冊使用の全12冊となる。

第1期の表音棒引きから歴史的仮名遣いに改め、漢字数も増加させた。国民的行事・習慣・趣味あるいは、童話・伝説・神話等の文学的教材も多くなったが、一面、国家主義的精神を意図した忠君愛国的・軍国主義的教材（「広瀬中佐」「水兵の母」「日本海海戦」など）も採用されるなど、日露戦争後の影響も強くみられる。

【歴 史】

教科書名：『尋常小学日本歴史』巻1～2

修正版『尋常小学日本歴史』巻1～2

使用開始年：明治43（1910）年～

使用学年：尋常小学校第5～6学年



図11 『尋常小学日本歴史 巻1』

（解 説）

第1期同様、時代の代表的人物を中心に編輯されており、修正版ともに、挿絵や説話を多く取り入れ、児童の興味を高める工夫がなされている。

明治44年の修正版では、国体、国情の教材を強化すべく内容が修正されている。旧版の巻1「第二十三 南北朝」を「吉野の朝廷」とし、「御歴代表」から北朝の天皇を削除している。この教科書を翌年から使用することになり、この修正版をもって実質上の第2期の歴史教科書となった。

2-3 国定第3期

【国語】

教科書名：『尋常小学読本』巻1～12（通称：「黒表紙本」）

『尋常小学国語読本』巻1～12（通称：「ハナ・ハト読本」）

使用開始年：大正7（1918）年～

使用学年：尋常小学校第1～6学年

使用世代：明治44年4月生～

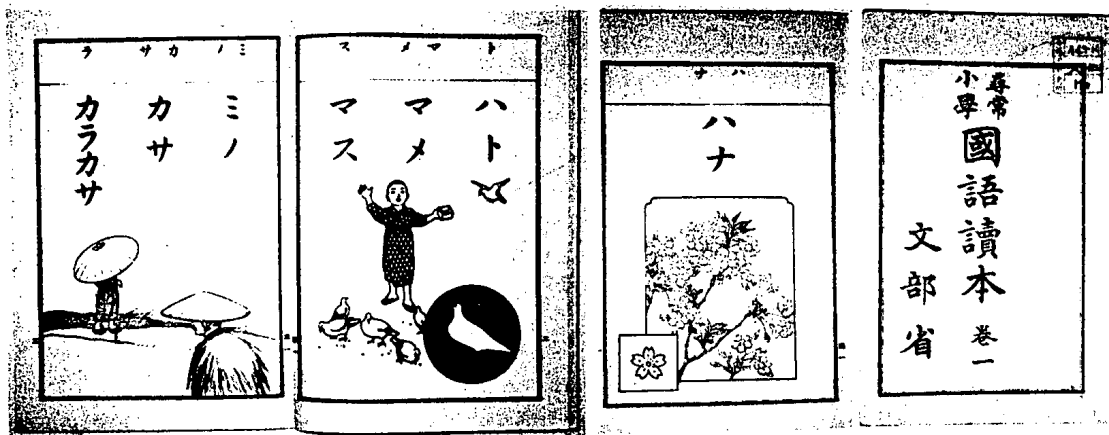


図12 『尋常小学国語読本 巻1』

（解説）

この期は、2種の教科書が同時に使用され、また、使用期間は国定期中最長で、さまざまな特色、工夫がみられる。

『尋常小学読本』は、いわゆる「黒表紙本」と呼ばれた教科書である。旧読本の文章の平易化、課数の増加などの工夫をした「ハタ・タコ読本」

の修正本であるが、全国的には採用数が少なかった。

一方、通称「ハナ・ハト読本」といわれたいわゆる「白表紙本」の『尋常小学国語読本』は、自由な編輯により、教材を新しく児童生活を中心としたものに求めた。内容的には、児童自身を主人公にしたものや、童話・童謡などの文学教材をはじめ、外国紹介あるいは外国人を主人公とするものなど、国際的視野に立った教材が多く採用された。これが、児童に親しまれ歓迎され、同じ時期の「黒表紙本」に比べて、全国各府県の三分の二以上で使用される人気であった。

【歴史】

教科書名：『尋常小学国史』上、下巻

使用開始年：大正10（1921）年～

使用学年：尋常小学校第5～6学年

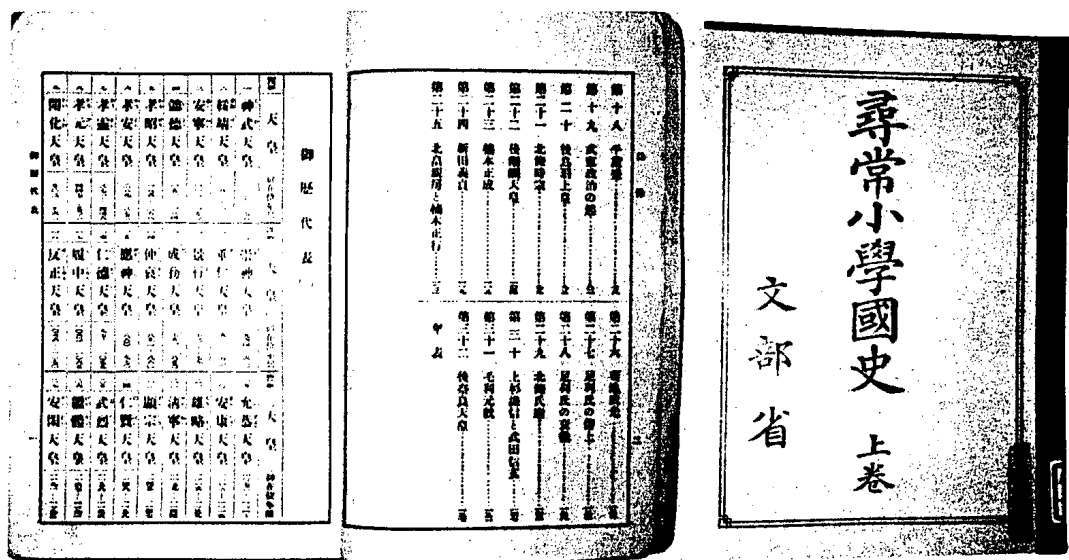


図13 『尋常小学国史 上巻』

（解説）

この期から、教科書名を「日本歴史」から「国史」へと改称し、この後
国定歴史教科書が使用停止になるまで続いた。

神話や人物の記述、挿絵等を多くし、内容の理解度を高めるため編集上の配慮がみられ、内容も豊富で頁数もふえた。だが、板垣退助らの「民選議院設立の建白」を削除するなど、天皇中心の国体思想の色彩が強く出た教科書となった。

2-4 国定第4期

【国語】

教科書名：『小学国語読本』巻1～12（通称：「サクラ読本」）

使用開始年：昭和8（1933）年～

使用学年：尋常小学校第1～6学年

使用世代：大正15年4月生～

（解説）

「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」で始まる通称「サクラ読本」といわれ、この教科書から挿絵、表紙とも色刷りが採用され、新鮮な印象を与えた。

巻頭が、単語からではなく「サイタ サイタ……」の文で始まる、いわゆる文章法の採用は国語教科書史上特筆されることであり、新鮮な挿絵の色刷りと相まって人気の高い教科書である。

国定教科書のなかでも、文学的教材の比率が最も高く、対話的・劇的教材など文学的精神が豊富といわれる。

しかし一方、教材の中には、「空中戦」「東郷元帥」などの軍国教材、「天の岩屋」「神武天皇」「羽衣」などの神話・古典教材、「浦島太郎」「サルトカニ」などの昔話・伝説教材が採用されており、これらの教材から、大正のデモクラテックな雰囲気を感じさせる国定第3期とは対照的に、忠君愛国的な軍国主義の教科書へと踏み出している。

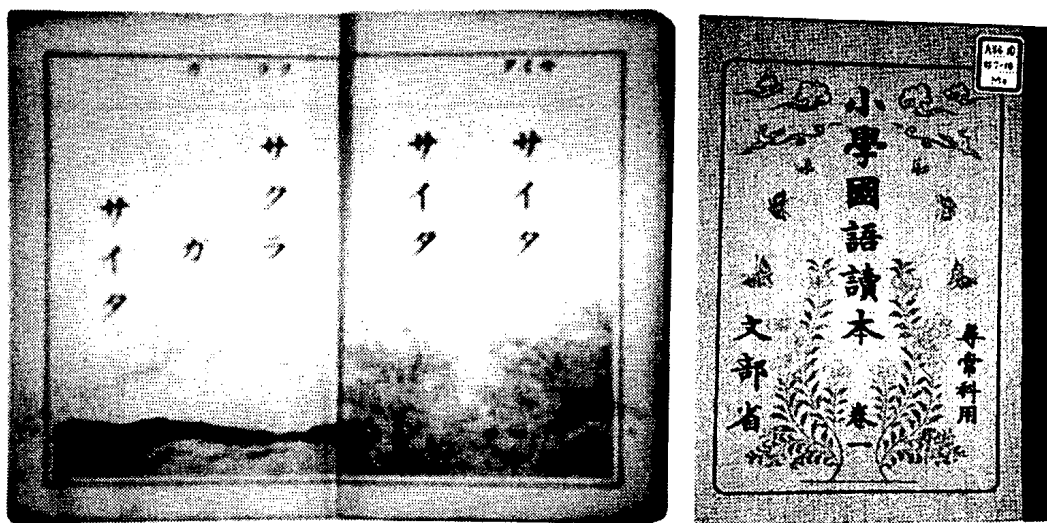


図14 『小学国語読本 卷1』

【歴史】

教科書名：『尋常小学国史』上、下巻

使用開始年：昭和9（1934）年～

使用学年：尋常小学校第5～6学年

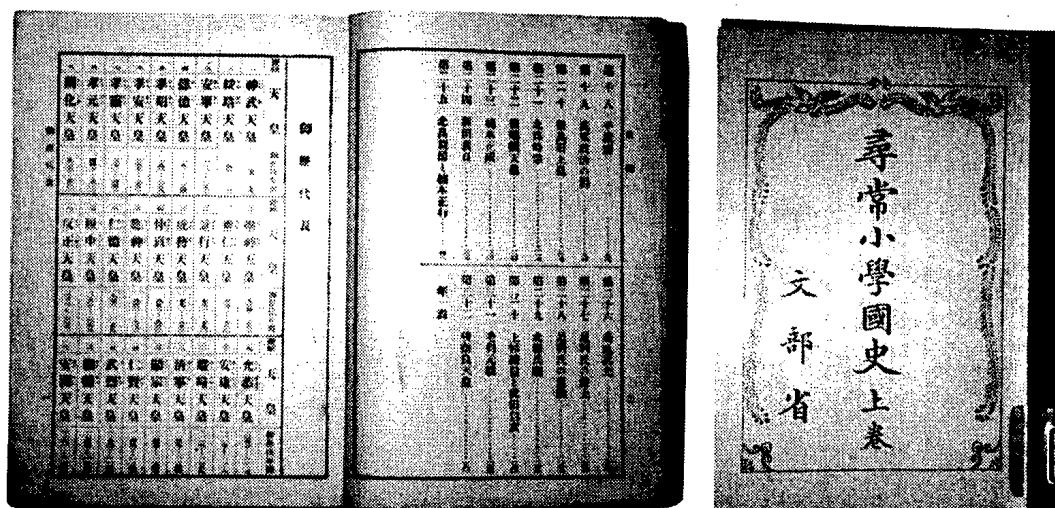


図15 『尋常小学国史 上巻』

(解 説)

これまでの、文語体を口語体に改めた。内容的には、国定第3期と殆ど同じで、大正から昭和への時代の推移による追加・修正が主である。例えば、下巻の終わりには、「今上天皇の即位」と「国民の覚悟」が追加されるなど満州事変以後の国際情勢からくる、国体観念の育成を考慮したものとなっている。

2-5 国定第5期

【国 語】

教科書名：『ヨミカタ』1～2、『コトバノオケイコ』1～2
『よみかた』3～4、『ことばのおけいこ』3～4
『初等科国語』1～8

使用開始年：昭和16(1941)年～

使用学年：『ヨミカタ』1～2、『コトバノオケイコ』1～2

国民学校初等科第1学年

『よみかた』3～4、『ことばのおけいこ』3～4

国民学校初等科第2学年

『初等科国語』1～8 国民学校初等科第3～6学年

使用世代：昭和9年4月生～

(解 説)

昭和16年「国民学校令」が公布される。これによって義務教育の年限が8年となるとともに（実施されない）、従来の国語、修身、地理、歴史が統合されて国民科となり、国語は国民科国語と改められた。

初等科第1学年『ヨミカタ』が「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」で始まることから、通称「アサヒ読本」といわれる。表紙、本文とも色刷り

の国民学校の教科書である。

『初等科国語』は、昭和17年の戦時中につくられ、『ヨミカタ』に続いて初等科第3学年から各学年2冊使用の教科書である。

軍国における忠君愛国の国民精神を鼓舞する内容や、東亜各地を教材として取り上げ、教育目的を「皇国民の練成」へと導く、戦時体制下における、極めて軍国主義的色彩の濃い教科書である。

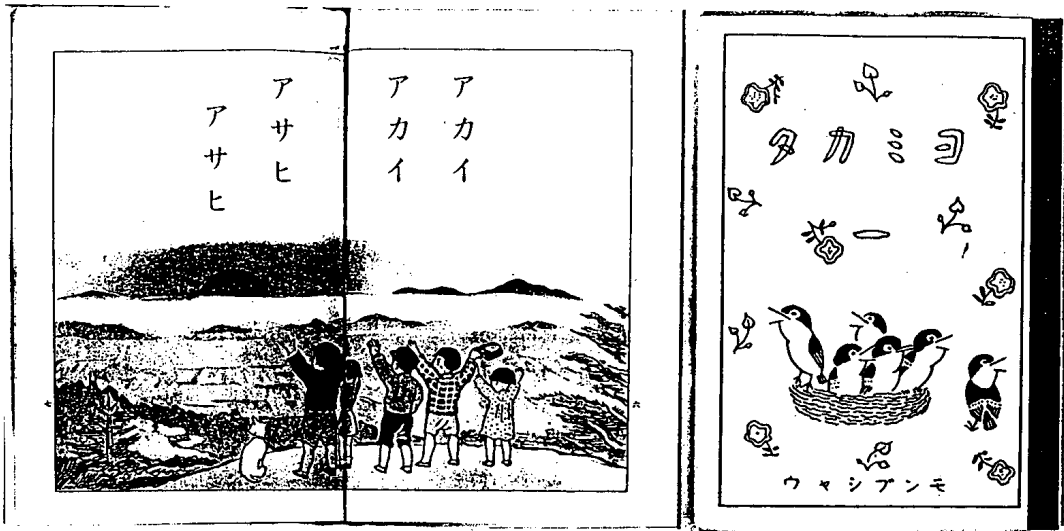


図16 『ヨミカタ 1』



図17 『初等科国語 1』

『コトバノオケイコ』は、国定第5期と同時に刊行された教科書で、書き込み式の国語練習帳を兼ねており、国民学校初等科第1～2学年での使用となっている。

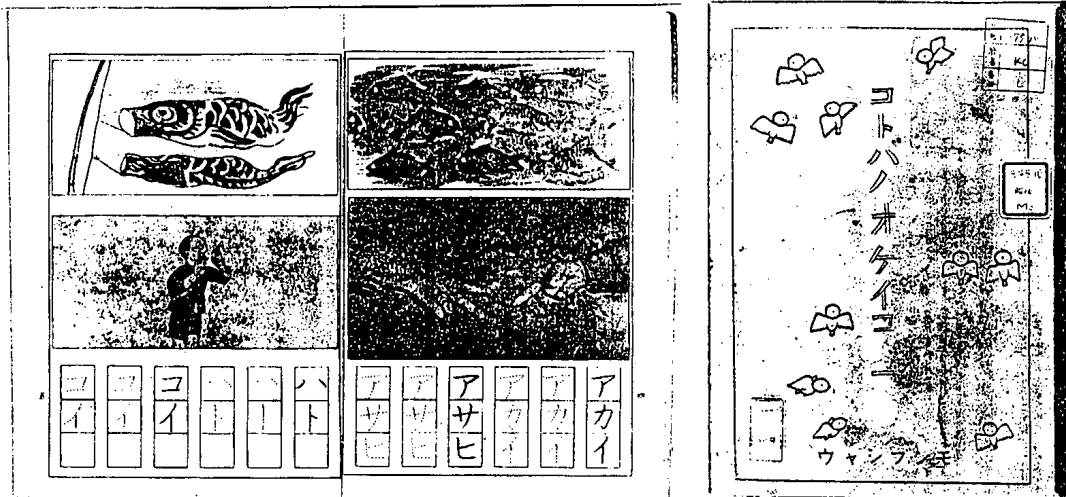


図18 『コトバノオケイコ 1』

【歴史】

教科書名：『小学国史』上、下巻 尋常科用

使用開始年：昭和15（1940）年～

使用学年：尋常小学校第5～6学年

（解説）

教科書名を『小学国史』と改めた。目次の次に「神勅」が挿入されるとともに、満州事変以後の国情についての叙述も加えられ、「皇国民の練成」を基本目標とした、国体明徴の徹底を求める教材が多く占めるようになった。

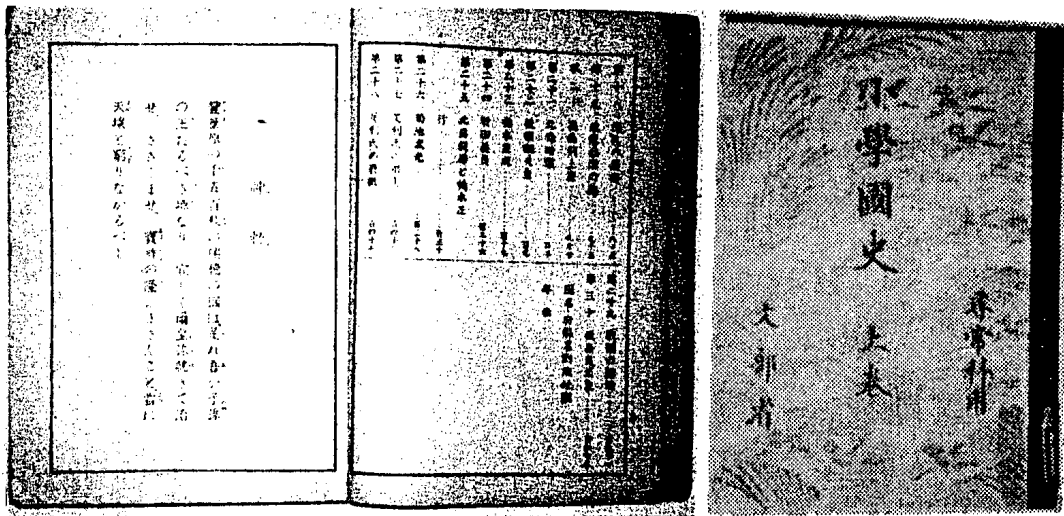


図19 『小学国史 上巻』

2-6 国定第6期

【歴史】

教科書名：『初等科国史』上、下

使用開始年：昭和18（1943）年～

使用学年：国民学校初等科第5～6学年

（解説）

前期の『小学国史』刊行と時を同じくして、既に国民学校における国史教育の方針の基に企画され、昭和18年から使用された教科書である。

これまでの人物本位の教材配列、課題名を国民科国史の方針により、課題名や記述を全く新しく更新した。

「神勅」、「御歴代表」を最初に掲げ、尊皇愛国、神国日本、海外発展、国防などの戦時教材が加えられ、「皇国思想」に忠実な「皇国民の練成」を目標とした、軍国主義的教科書となる。



図20 『初等科国史 上巻』

3 暫定期の教科書

昭和20（1945）年、ポツダム宣言の受諾により太平洋戦争は終結し、軍事教育の廃止、戦時教科書の墨ぬり、修身・国史・地理教科の授業停止などがGHQより次々と指令された。一方、米国教育使節団の報告に基づく、新教育制度創設の準備も着々と進行した。

昭和22（1947）年「学校教育法」が公布され、6・3制の新教育制度がスタート、教師用に学習指導要領が作成された。児童用の教科書は、文部省が検定、認可、著作権を有するものを使用することになった。

ここでは、終戦直後から使用されたいわゆる「墨ぬり教科書」、「暫定教科書」（折りたたみ教科書）及び、昭和26年に学習指導要領の全面的改訂以前までに使用された「文部省著作教科書」を、仮に暫定期の教科書としてまとめた。

3-1 墨ぬり教科書

(解説)

終戦直後の国民学校期の教科書は、占領政策に対応して、戦時教材の大部分に墨をぬり、暫定的に使用することから始まった。即ち、GHQは「修身」「歴史」等の授業を停止し、その教科書と教師用参考書の回収を指示した。国語とその他の教科書は、従来の国民学校初等科教科書から、軍国主義的及び超国家主義的記述を削除することで、使用が許可された。

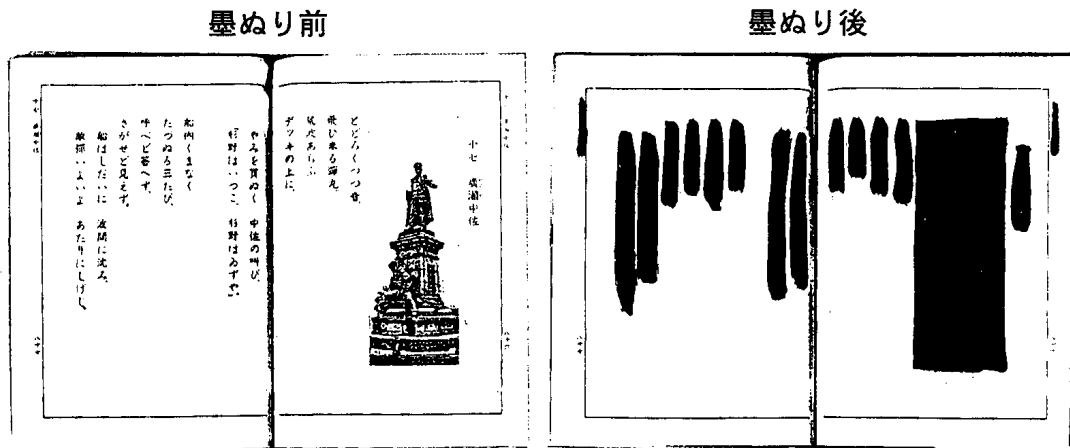


図21 『初等科国語 4』

しかし、「訂正削除」の方法については具体的指示はなく、実際には、「墨ぬり」「切り取り」「紙貼り」「糊付け」の四つの方法がみられる。いずれも、学校現場の判断に任された形となっていたようであるが、石森延男によると

「ハサミであちこち切り取ってしまったら、本にならないから、結局、墨を塗ろうということになった」(『昭和戦後史 教育のあゆみ』)

ということで、いわゆる「墨ぬり」が結果的に多くみられる訂正削除のパターンであった。

れA5版に切り揃えることから始まり、粗末な分冊折りたたみ式のものであった。概ね他の教科も同様の体裁であったため、別に「折りたたみ教科書」あるいは「仮綴じ教科書」とも呼ばれている。

『ヨミカタ』、『よみかた』及び『初等科国語』についてみると、いずれもほぼ1冊14～15頁程度のものとなっている。

さらに例えば、初等科第1学年の『ヨミカタ1』は3分冊となっており、この期の国語教科書の奇数巻号はいずれも各学年の前期用が3分冊の体裁となっている。このような分冊の刊行形態は、ほかの教科でも『カズノホン』『初等科算数』『初等科理科』をはじめとして、高等科の教科にもみられる。

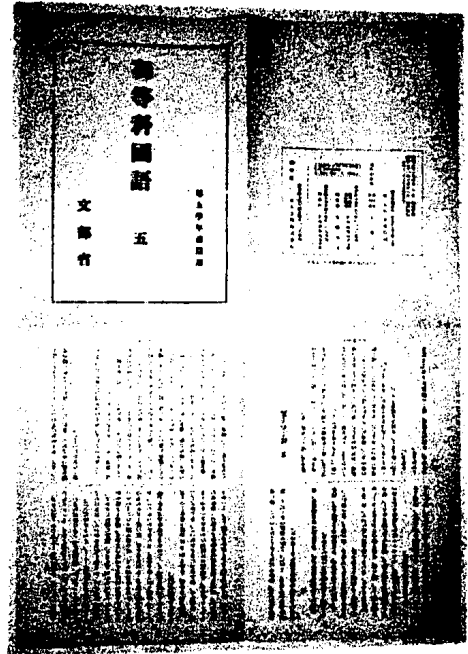


図24 折りたたみ式のもの

【歴史】

教科書名：『くにのあゆみ』上、下

使用開始年：昭和21（1946）年10月～

使用学年：国民学校初等科第5～6学年

（解説）

暫定的に昭和21年度使用のために準備を進めていた文部省編集の教科書『初等科国史』は、結局GHQの許可を得られず、急遽、家永三郎ら歴史学者の執筆により『くにのあゆみ』が作成され、かろうじて同年10月から再開の歴史の授業に使用された。

従来の「神話」的歴史の記述を改め、考古学を取り入れた石器時代から

始まる科学的歴史の記述へと変わった。

なお、この教科書は昭和23（1948）年からは、小学校社会科の補助教材となり、その後、中学校の「社会科副読本」として使用された。

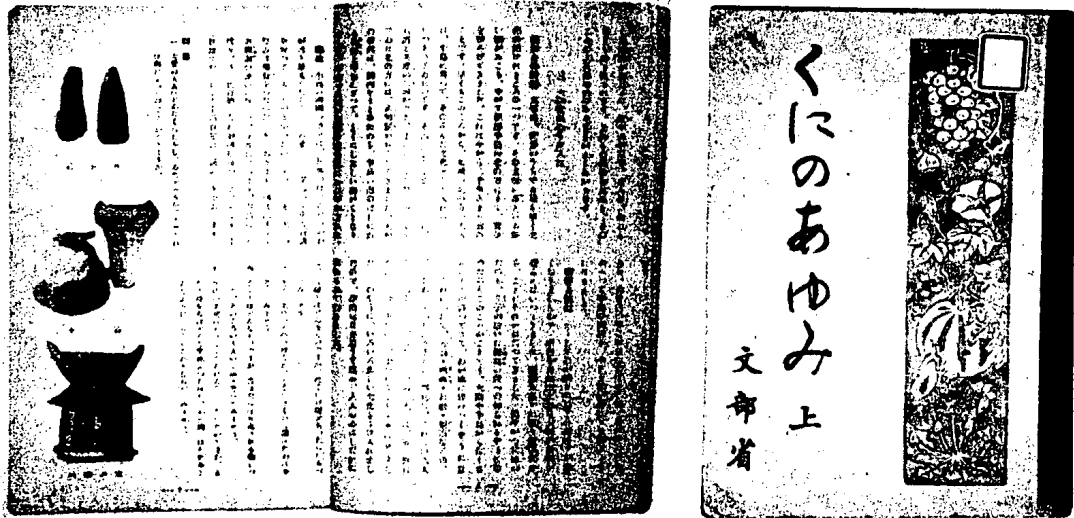


図25 『くにものあゆみ』

3-3 文部省著作教科書

【国語】

教科書名：『こくご』1～2、『国語』第3学年 上、下
『国語』第4～6学年 各上、中、下
『まことさん はなこさん』、『いなかの いちにち』
『いさむさん のうち』

使用開始年：昭和22（1947）年～
昭和24（1949）年～

使用学年：小学校1～6学年

使用世代：昭和15年4月生～

(解 説)

いわゆる「文部省著作教科書」である。昭和22（1947）年国民学校初等科は小学校となり、6・3制が発足した。新しい学校制度の実施とともに、新時代の要求に応えるべく、「話す」「聞く」「読む」「書く」を主体として編集された、戦後最初の国語教科書として注目すべきものである。



図26 『こくご 1』

『こくご』は、「みんな いいこ」という平かなで始まっており、『読書入門』（文部省 明治19年）以来の、カタカナが平かなより易しいとの伝統を破ったものである。内容は、生活言語を重んじた児童の自己表現としてのことばに力点がおかれ、ほとんどが口語文で文章が平易になっている。

さらに、昭和24年には、『まことさん はなこさん』、『いなかのいちにち』及び『いさむさんのうち』の3冊が発行された。これは、新しい教科書の検定制度の下、民間で発行される新しい国語教科書のモデルとして、GHQの提案



図27 『国語 3』

により文部省が作成したものである。これらは、石森延男らが中心となって編集したものであり、国語入門教科書として、この後の検定教科書に与えた影響は大きい。



図28 『まことさんはなこさん』 図29 『いなかのいちにち』 図30 『いさむさんのうち』

【歴 史】

教科書名：『まさおのたび』、『たろう』、『大むかしの人々』
『日本のむかしと今』、『村のこども』、『都会の人たち』
『気候と生活』、『土地と人間』

使用開始年：昭和22（1947）年～

使用学年：『まさおのたび』 小学校2学年

『たろう』、『大むかしの人々』 小学校3学年

『日本のむかしと今』 小学校4学年

『村のこども』、『都会の人たち』 小学校5学年

『気候と生活』、『土地と人間』 小学校6学年

（解 説）

戦後、新しい教育制度のもとに誕生した新教科の「社会科」に、当初は

教科書がなく、教師が児童の実態や地域の特性を考慮し、教科内容を設定することになっていた。しかし、実際の学校現場での学習指導は容易ではなく、社会科教科書への要望が高まり、その結果として誕生した教科書である。

新教科書は、児童の生活体験を中心とし、児童が問題を意識し、解決の手だてを探るよう、教材の編集がなされている。

また、この時期に新制中学1年生用教科書として使用されたのが、『あたらしい憲法のはなし』である。

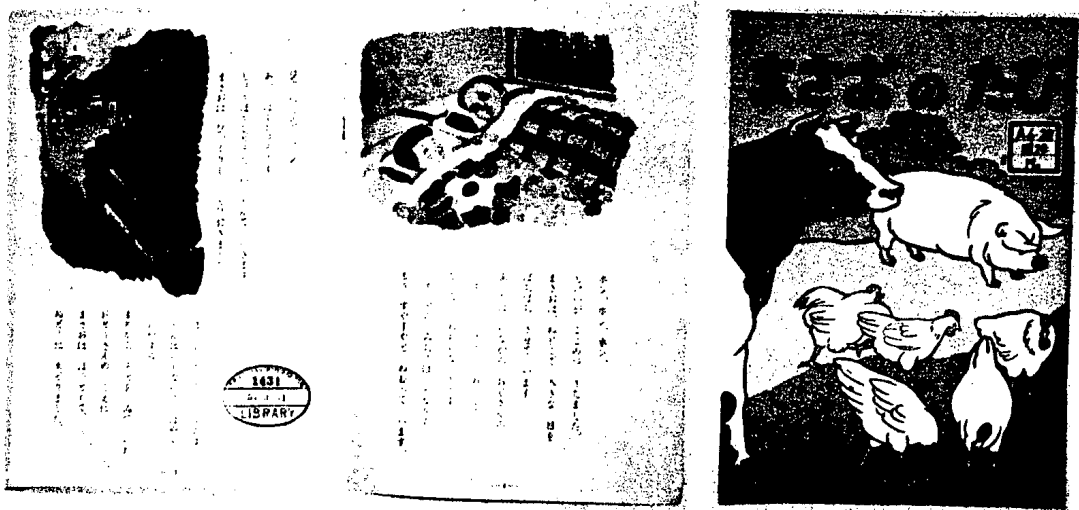


図31 『まさおのたび』

参照資料

- 海後宗臣、仲 新共編『近代日本教科書総説 解説編』講談社 1969
- 海後宗臣監修『図説 教科書のあゆみ』日本私学教育研究所 1971
- 読売新聞戦後史班編『昭和戦後史 教育のあゆみ』読売新聞社 1982
- 家永三郎等編『復刻国定教科書 国民学校期』解説 ほるぷ出版 1982
- 谷口一弘、谷内 鴻共著「昭和21年度暫定教科書目録等一覧－国民学校用－」
『國學院女子短期大学紀要』第2号 1984
- 海後宗臣、仲 新、寺崎昌男共著『教科書でみる近現代日本の教育』（東書選書）
東京書籍 1986
- 中村紀久二著『教科書の社会史』（岩波新書）岩波書店 1992

付・教科書関係参考文献

以下の参考文献は、図書館員や図書館利用者が教科書制度や教科書の歴史などに関して、関連情報を比較的容易に入手、または利用可能な資料を中心としてリストを作成したものである。従って、戦前刊行の資料や、研究論文あるいは、個別的主题等に関わるものなどは除いてあり網羅的とはなっていない。詳細については、『教科書関係文献目録1970～1992』等を利用されたい。

【概説・通史の部】

- 仲 新著 『教科書の発達』(教育文庫) 河出書房 1947
唐沢富太郎著『教科書の歴史』創文社 1956
水谷三郎編『教科書懇話会の歴史』教科書懇話会清算人 1961
海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』全27巻 講談社 1962～67
海後宗臣、仲 新共著『教科書でみる日本の教育 100年』東京書籍 1963
海後宗臣、仲新共編『近代日本教科書総説』全2巻(解説編、目録編) 講談社 1969
海後宗臣監修『図説 教科書のあゆみ』日本私学教育研究所 1971
高木市之助著『尋常小学国語読本』(中公新書) 中央公論社 1976
秋田喜三郎著『初等教育国語教科書発達史』文化評論出版 1977
吉田東朔編『小學讀本便覧』第1,2,3,6,7 巻 武蔵野書院 1978～
東京書籍編『近代教科書の変遷—東京書籍七十年史—』東京書籍 1980
山住正巳著『教科書』(岩波新書) 岩波書店 1982
井上赳、吉田東朔共編『国定教科書編集二十五年史』武蔵野書院 1984
中村紀久二著『教科書物語—国家と教科書と民衆—』(ほるぷ現代教育撰集, 29) ほるぷ出版 1984
藤富康子著『サクラ読本追想』国土社 1985
粉川宏著『国定教科書』(新潮選書) 新潮社 1985
海後宗臣、仲 新、寺崎昌男共著『教科書でみる近現代日本の教育』(東書選書) 東京書籍 1986
片岡徳雄編書『教科書の社会学的研究』福村出版 1987
梶山雅史著『近代日本教科書史研究—明治期検定制度の成立と崩壊—』ミネルヴァ書房 1988
中内敏夫著『軍国美談と教科書』(岩波新書) 岩波書店 1988
原田種雄、徳山正人編『小学校にみる戦前・戦後の教科書比較』ぎょうせい 1988

中村紀久二著『教科書の社会史』(岩波新書) 岩波書店 1992
海後宗臣監修 小池俊夫解説『図説 教科書の歴史』日本図書センター1996
 (『図説 教科書のあゆみ』の復刊)
徳竹敏夫著『教科書の戦後史』新日本出版社 1997

【復刻教科書の部】

『尋常小学国語読本』(復刻) 全12巻 池田書店 1970
『尋常小学国語読本』(復刻) 全12巻 秋元書房 1970
『尋常小学修身書』(復刻) 全6巻 ノーベル書房 1970
『尋常小学修身書』(復刻) 全6巻 池田書店 1970
『尋常小学修身書』(復刻) 全6巻 (第3期国定修身教科書 大正世代) 秋元書房 1970
『尋常小学修身書』(復刻) 全6巻 (第4期国定修身教科書 昭和世代) 秋元書房 1970
『尋常小学修身書』(復刻) 全6巻 池田書店 1978
『満州補充読本』(復刻) 全6巻 国書刊行会 1979
『文部省著作社会科教科書』(復刻) 全16巻 日本図書センター 1981
家永三郎等編『復刻 国定教科書 国民学校期』全2巻 ほるぷ出版 1982
『北海道用尋常小学読本』(合本復刻) 全1巻 (地域教育史資料1) 文化評論社 1982
『沖縄県用尋常小学読本』(合本復刻) 全1巻 (地域教育史資料3) 文化評論社 1982
中村紀久二監修『文部省著作戦後教科書』(復刻) 暫定教科書編4巻、国語教科書編18巻、別巻1 大空社 1984
中村紀久二監修『文部省著作暫定教科書 国民学校用』(復刻) 全17巻 大空社 1984
中村紀久二編著『墨ぬり教科書』(復刻) 全50冊 芳文閣 1985
『復刻 墨ぬり教科書』全12巻、解説1巻 大空社 1985
佐藤秀夫、中村紀久二共編『文部省掛図総覧』(復刻) 全10巻 東京書籍 1986
中村紀久二解説『復刻 国定歴史教科書』全17巻 大空社 1987
中村紀久二解説『復刻 国定修身教科書』全30冊、掛図1、別図1 大空社 1990
中村紀久二解説『復刻 国定高等小学校読本』全39冊、別冊1 大空社 1991

【文献目録の部】

中村紀久二編『教科書関係文献目録 1970～1992』学校教育研究所 1993

【検定目録の部】

永芳弘武、中村紀久二、加藤宗晴共編 『教科書検定総覧』全4巻（小学校編、中学校編、高等学校編上下巻）小宮山書店 1968～71

【所蔵目録の部】

『東京学芸大学所蔵 望月文庫目録』 東京学芸大学附属図書館 1967

鳥居美和子編『明治以降教科書総合目録』全2巻（小学校編、中学校編）小宮山書店 1967～85

東書文庫編『東書文庫所蔵 教科用図書目録』全3巻 東京書籍 1978～1982

『北海道教育大学所蔵 教科書目録 新編』（北海道教育資料目録12）北海道教育大学附属図書館 1989

『大阪教育大学附属図書館所蔵 教科書目録』第1集 大阪教育大学附属図書館 1998

<付 記>

本稿は、平成11年11月4日開催された、「北海道教育大学創立50周年並びに大学院修士課程完成記念事業」の一環として企画された、「北海道教育資料展－教科書で見る20世紀－」のパネル展用に筆者が作成したものが土台となっている。

同展は、教科書の国定制度から現行の検定制度までをメインテーマとしているが、本稿ではこれを明治以降からの近代学校教育制度発足時まで広げ、戦後の文部省著作教科書までの期間として、全体に加筆・訂正をしたものである。本稿作成にあたっては、同展を企画・担当された北海道教育大学附属図書館の承諾をいただいた。記してお礼申し上げる。また、本文中に図版として使用の教科書類は、一部筆者所蔵分を除きその大部分をやはり北海道教育大学附属図書館所蔵のものを使用させていただいた。ここに重ねて感謝申し上げたい。